瀬戸内寂聴「出雲崎」における トルーマン・カポーティ「ミリアム」からの 影響について

道　合　裕　基

はじめに

瀬戸内寂聴（1922–2021）は、その波乱万丈な生涯で知られる。瀬戸内は、多くの作品を残しているが、その一つに「出雲崎」という短編がある。1990 年『小説新潮』1 月号に発表されたもので、2001 年に新潮社から刊行された短編集『髪』に収録された。この短編集収録の際、題名を「海」と改めている。この改題の理由は、短編集『髪』に収録された作品が、漢字一字のものが多いので、それに合わせて統一したからである。その後、『瀬戸内寂聴全集』第 15 巻に収録され、「出雲崎」に再度改められている[1)]。「出雲崎」は、昭和後期から平成初期にかけて瀬戸内が発表していた短編群の一つで、同時期に発表された短編では珍しく、幻想的な幕切れが特徴となっている。そして、瀬戸内は、自身の作品の中で「出雲崎」を好きな作品の一つに挙げている。

本稿では、「出雲崎」の成立に関わっていると思われるトルーマン・カポーティ（1924–1984）の短編「ミリアム」（Miriam 1943）との比較を行い、瀬戸内の文学におけるアメリカ文学からの影響の可能性を指摘することにしたい[2)]。

これまで、瀬戸内の作品をめぐる比較文学的研究は、『源氏物語』などの日本の古典文学からの影響を考察したものが発表されている[3)]。瀬戸内とアメリカ文学との関係については、管見の限り、薬師寺章明によるウィリアム・フォークナー（1897–1962）の『響きと怒り』（*The Sound and the Fury* 1929）と、瀬戸内の『死せる湖』（1967）との類似性を指摘する論が発表されているぐらいである。ただし、薬師寺の論では、瀬戸内によるフォークナーや、彼の作品についての言及などには触れられておらず、物語の時間の描き方の類似に触れているにすぎない。つまり、瀬戸内とフォークナーの関係については、一旦脇に置き、表現法の類似性に着目した論なのである[4)]。そこで、本稿では、瀬戸内が「出雲崎」の作中で言及している「ミリアム」との比較を行い、両作品の間テクスト性について考察する。瀬戸内の「出雲崎」では、カポーティの名と「ミリアム」について触れられている。次に引用するのは、「出雲崎」における「ミリアム」への言及である。ここでは、主人公の「男」が、交際した最年長の老女のことを思い出している。

> 男はトルーマン・カポーティの「ミリアム」という短篇に出てくる白髪の少女ミリアムとはこんな顔ではなかったのかと思った。その思いつきは老女をたいそう喜ばせた。女はその小説の中の、孤独の余り神経がおかしくなっていく老女とほとんど同年になっていた[5)]。

引用のように、「出雲崎」において「ミリアム」に言及されていることは、「ミリアム」からの影響を窺わせるのである。現に、瀬戸内は、エッセイ『愛と別れ── 世界の小説のヒロインたち』（1987）で、カポーティの代表作『ティファニーで朝食を』（*Breakfast at Tiffany's* 1958）の詳細な梗概を挙げて紹介している。このエッセイは、瀬戸内が今まで読んできた海外の文学作品のヒロインについての雑感を記述する形となっている。このことからも、瀬戸内が、カポーティに触れていたことが分かる。これまで日本近現代文学の作家におけるトルーマン・カポーティからの影響は、村上春樹（1949–）が明言しており、事実、カポーティの代表作『ティファニーで朝食を』の翻訳も行っている。その他の作家における影響については、管見の限り、特に検討されていない。それゆえに、「出雲崎」での「ミリアム」への言及は示唆に富んでいる。つまり、「出雲崎」での言及を参照するならば、瀬戸内には、カポーティからの影響の痕跡が浮かび上がるのである。

瀬戸内がこれまで指摘されているように、日本古典文学だけではなく、アメリカ文学の読書体験も、自身の創作に活用していることを辿るのが本稿の目的である。

１．「出雲崎」と「ミリアム」について

瀬戸内の「出雲崎」とカポーティの「ミリアム」の比較にあたり、煩雑ではあるが、この２作について梗概を紹介しておきたい。まず、瀬戸内の「出雲崎」は、次のような物語である。

【「出雲崎」の梗概】

中年の「男」が主人公である（本名などは明かされない）。「男」は、小説だけでは食えず、フリーライターなどをして生活している。現在、仏教ブームに肖り、良寛についての記事を書くため、出雲崎を訪れている。その海岸で「男」は、苦しんでいる若い女に出会い、介抱する。女を車に乗せ、身の上話を聞く。現在、女は妊娠しており、それが元で過去三度も男に捨てられたという。「男」は、女の話を聞き、自身のこれまでの半生を振り返る。「男」は女性関係が派手で、妻に迷惑をかけたので、妻が出て行った。中でも19歳も年上の老女の恋人になっていたことがある。その老女の顔を見て、カポーティの「ミリアム」に登場するミリアムの顔は、こういう顔ではないかと思ったことを想起した。そして、ミリアム、老女、目の前の女の顔とが重なって見えるのであった。

こうして二人は出雲崎を旅する。良寛ゆかりの石仏、お堂などを見学し、「男」は、女と昔からの知り合いであったかのような安心感を覚える。「男」は女に声をかけたが、不思議なことに、それまで同行していた女が消えていた。女が何者であったのかも明らかにされず、物語が終わる。

梗概に示したように、カポーティの名と「ミリアム」についての言及がある。瀬戸内は、全集の自作解説で、「出雲崎」について、次のように語っている。

良寛を「手毬」という小説に書くため、私は度々、この地方へ旅をしていた。その時、自然に生まれたのがこの短篇で、好きなものの一つである[6)]。

上述の瀬戸内の言によれば、「出雲崎」は、別の作品の取材旅行による副産物であったという。ただし、「ミリアム」への言及についての解説は行われていない。作中で関係のない作品名に言及するとは考えられないので、「出雲崎」は、「ミリアム」の影響下にあると言えるだろう。では、「出雲崎」で言及されているカポーティの「ミリアム」は、どのような物語なのか。

カポーティの「ミリアム」は、19歳の時の作品で、オー・ヘンリー賞を受賞したカポーティの短編の代表作である[7)]。カポーティの早熟ぶりを示す作で、以下のような幻想的な作品となっている。

【「ミリアム」の梗概】

老婦人・ミセス・ミラーが、アパートに一人で住んでいる。亡夫の保険金で、友人もなく、毎日同じようにして暮らしている。

ある日、映画を見に行くことにしたミセス・ミラーは、ミリアムという少女に出会う。彼女は銀白色の髪で、大きな目が特徴の不思議な少女であった。ミセス・ミラーは、彼女と一緒に映画を見た。数日後、アパートにミリアムが訪れる。ミリアムはわがままで、ミセス・ミラーに食事をねだり、挙句の果てにミセス・ミラーのカメオを奪い、自身が身に付ける。なぜかミセス・ミラーは、ミリアムに抗うことが出来なかった。

しばらくして、ミリアムが荷物を持って来て、この部屋に住むという。ミセス・ミラーは怖ろしくなり、部屋を抜け出し、階下の住人の部屋を訪れる。すると住人の男が、ミセス・ミラーの部屋を見に行ってくれる。しかし、そこには誰もいなかった。結局、ミセス・ミラーの幻覚だろうとみなされる。その後、ミセス・ミラーが部屋に戻るとミリアムがいた。

つまり、ミリアムは、ミセス・ミラーが、老い・孤独によって生み出した存在だったのである。

「ミリアム」は、老婦人の孤独が生み出した「二重身」を登場させた幻想文学と言えるだろう。以上の梗概を踏まえた上で、具体的にこの2作の比較を行うことにしたい。

2.「出雲崎」と「ミリアム」の比較

2.1. 主人公達の境遇

「出雲崎」の主人公は、小さな文学賞を受賞したものの、作家だけでは、食えないので、フリーライターとして生活している。しかも、派手な女性関係が元で、妻に出て行かれ、その後も女性遍歴を重ねている。一見すると華やかなこの男の周囲には、死の臭いや孤独感が漂っている。なぜならば、父の家業である医者を継がず、小説家になると揉めたことで、父が急逝し、病弱

だった娘が死んだと風の便りに聞いたが、元妻からは何の連絡もないという状態になっているからである。次に引用するのは、「出雲崎」における「男」の心理描写である。

> 世が世なら、良寛や山頭火のように僧形になり、托鉢して歩き、どこかの花野で生き倒れにならないものかと思う。穂芒の生い茂る中に倒れていれば、冬の雪が降りつもり、雪がとける春までは誰にも見つからないだろう。万一、飢えた獣の餌になれば本望だと思う[8)]。

女には不自由していないが、その内面に孤独を抱え、作家としても三流の作家から脱却出来ないでいる。そのため、小説ではないが、良寛についてのルポを執筆することで、新たな境地へと至ることを希望しているのである。

一方の「ミリアム」でのミセス・ミラーは、夫に死に別れ、孤独な日々を送っている。ミセス・ミラーには、「出雲崎」の「男」よりも明瞭に孤独感が現れている。なぜならば、何の変化も無い退屈な生活を送り、常に孤独な状態にあるからである。次に引用するのは、「ミリアム」でのミセス・ミラーの外見と、その生活についての描写である。

> 彼女の生活はつましい。友だちというような人間はいないし、角の食料品店より先に行くこともめったにない。アパートの住人たちは彼女がいることに気づいてもいないようだ。服は地味。髪は鉄のような艶のある灰色で、短く切って、軽くウエーブをかけている。化粧品は使わない。容貌は十人並みで目立たない。（中略）彼女の一日は決まりきっている[9)]。

引用からは、孤独な状態にあるミセス・ミラーの様子が窺える。男女の別はあるが、孤独な生活を送っている主人公という点では、「男」とミセス・ミラーは共通すると言えるだろう。そして、彼らの置かれた状態が、「異界」との接触を可能にするのである[10)]。

ここで、本稿における「異界」という語の定義について触れておくと、「異界」は、「他界」という語と異なり、死後の世界のみを指す訳ではない。「異界」は、死後の世界だけではなく、異国、死後の世界以外の異世界（異次元など）を包摂する民俗学・人類学の用語である。「出雲崎」と「ミリアム」における「異界」との接触とは、それぞれ「男」が女と遭遇することが、ミセス・ミラーがミリアムと出会うことが該当する。「出雲崎」の女は、何者であるのかは最後まで明かされないが、消失したことからも「この世」の存在でないことは明白である。また、ミリアムは、ミセス・ミラーの老いと孤独が生み出した「二重身」であることから、「異界」の存在と言えるのである。「異界」の存在である両者は、主人公達の日常世界に変化を与え、奇妙な体験をもたらすのである。

上述のような「異界」との接触・交流を可能にするのは、接触者の置かれた状態が大きく作用する。「出雲崎」、「ミリアム」の場合は、「男」、ミセス・ミラー、２人の共同体内での周縁化された状況ゆえの「境界性」が該当しよう。２人が帯びる「境界性」は、ある集団・共同体内に属

していながらも、その内部の周縁に位置することで生じる属性である。すなわち、「境界性」は、帰属集団がありながらも、その内部で浮いた状態にあることから付帯される。そのため、もう一つの世界である「異界」との交流を可能にするのである。では、「男」、ミセス・ミラーは、いかにして「異界」との交流条件である「境界性」を帯びるのであろうか。

まず、「出雲崎」の「男」であるが、「男」は、自業自得ではあるものの、家族から見捨てられ、その正確な近況も知らない。人づてに真偽の定かではない近況を聞いている程度である。家族からの絶縁、作家としての芽の出ない状況等から一種の「境界性」を帯びるのである。

一方のミセス・ミラーも、夫に死に別れて以降、子どもも友人もいない文字通り孤独な状態にあり、アパートの他の住人達からも存在を認知されていない。それゆえに、ミセス・ミラーは、存在しているにもかかわらず、存在していないかのようにみなされるのである。つまり、集団に属していながらも、その存在を認知されていないがゆえに、ミセス・ミラーは、「出雲崎」の「男」以上に「境界性」を帯びているのである。このように、2 人が孤独ゆえの「境界性」を帯びているため、「異界」の存在である不思議な女やミリアムに遭遇することになるのである。

2.2.「異界」の存在との遭遇

前節で言及した主人公の孤独な境遇と関連し、その境遇の「境界性」ゆえに不思議な存在との遭遇を体験する。後述するように、この遭遇は、主人公達に大きな影響を与えることになる。次に引用するのは、「出雲崎」における「男」が女と出会った場面である。

> 女は海辺の砂の上に跪いて、病気の犬のように胴を波打たせて吐いていた。（中略）「大丈夫ですか」男は乾いた声で聞いた。女は砂についていた腕をあげ、両手で長い髪をかきあげた[11]。

「男」は、取材で訪れた海辺で苦しんでいる女を見かけたので、思わず介抱しに行ったのである。女が苦しんでいたのは、交際していた男の子どもを妊娠しているためだと説明されるが、女が妊娠中であるという点も、女が帯びる「境界性」を強調していると言えるだろう。なぜならば、妊娠中は、一人の人間の中に、もう一人の人間である子どもを宿した状態であることから、二人でありながらも、外見上は一人という変則的な状態であることから、「境界性」を帯びる。つまり、母と子が一体となっており、個人の識別が混在した状態であるので、分類・識別の明確ではない「境界性」を帯びた存在となるのである。また妊娠が、恒常的な状態でないことも、非日常を強調し、「境界性」を補強するのである。

このように、妊娠中の女と遭遇したことで、「男」は、一時的に不思議な体験をすることになるのである。他方、「ミリアム」では、ミセス・ミラーは、ミリアムと次のように遭遇する。

> 彼女（引用者注：ミセス・ミラーを指す）は、退屈しのぎにあたりを見た。そのとき、入り口のひさしの下に小さな女の子がひとり立っているのに気づいた。女の子の髪は、ミセス・

ミラーがこれまで見たこともないくらい長く、変わっていた。色は白子のようなシルバー・ホワイト。ふさふさしてゆったりと長く、腰のあたりまである[12)]。

遭遇した相手の年齢等は異なるが、「男」もミセス・ミラーも関わり合いになることを避けずに、交流を試みている。このように、「出雲崎」、「ミリアム」では、ともに不思議な存在と遭遇していることが分かる。そして、先行する「ミリアム」から不思議な女（少女）との遭遇という展開を、「出雲崎」は引き継いでいるのであろう。

2.3. 遭遇した場所と「境界性」

「出雲崎」と「ミリアム」において、主人公の「男」とミセス・ミラーが、それぞれ女とミリアムという不思議な存在と出会っている。彼らの遭遇は、前節までで見て来たように、置かれた境遇から帯びる「境界性」が、大きく作用していた。この「異界」との遭遇には、主人公達が帯びる「境界性」に加えて、彼らが遭遇した場所の帯びる「境界性」も作用していると思われる。なぜならば、「出雲崎」、「ミリアム」両作ともに、遭遇した場所の文化的・民俗的背景が示唆に富んでいるためである。

まず、「出雲崎」で「男」が女と出会った場所は海辺である。次の引用は、「出雲崎」における海の描写である。

気味の悪い程暖かい冬の入りだが、北国の日本海は、（中略）白い牙をむいた波が、震えながら攻め太鼓のような鈍い音をたてて汀に打ち寄せている。なめらかに見えた海は、よく見ると波立ち荒れていた[13)]。

冬の日本海であるにも関わらず、暖かい状態であり、「白い牙」に例えられる波や、「攻め太鼓」のような音といった不穏な描写がなされ、非日常との交流が起こるかのような気配を醸し出している。海辺は、船舶が停泊したりするだけではなく、「異界」との接触の場としての性格を有することは、民俗学などで指摘されている[14)]。例えば、海の遥か彼方に奇妙な世界が存在するという「海上他界観」という用語や、来訪神が海辺に漂着したという伝承などに示されている。「出雲崎」では、女が海からやって来た訳ではないが、「異界」との接点である海辺で「男」が女と遭遇することは、女が「異界」の存在であることを窺わせる。

また、「男」が女と一緒に訪れる場所が、良寛ゆかりの地であり、良寛堂の石地蔵や石柱などを見学していることも、示唆的と言えるだろう。周知のように、地蔵は、道の神としての側面だけではなく、水子供養と結び付いた菩薩でもある[15)]。女が何回も中絶しており、かつ妊娠中であるということから、女が中絶した子どもの供養としての意味と、境界神でもある地蔵に言及されることで、女の「境界性」をさらに強調している。そして、「男」に「異界」を体験させることになるのである。

一方、「ミリアム」で、ミセス・ミラーが、ミリアムに初めて会う場所は、映画館である。

> 近所の映画館で上映している映画の広告が目にとまった。面白そうな題名だったので、彼女は（中略）家を出た。映画館の切符売り場の前には長い行列が出来ていた。彼女は例の列の最後に並んだ[16]。

引用のように、普段は外出などしないミセス・ミラーが、映画を見に行こうとし、そこでミリアムに出会うのである。ミリアムと出会う場は、映画館であり、「出雲崎」での海辺とは異なり、近代的な施設である。しかし、映画もしくは、その前身となった幻燈には、「異界」との関連が付きまとう。

幻燈、映画各々は、光学技術を駆使し、不思議な世界を眼前に顕現させ、非日常をもたらす装置である[17]。現在でも、映画鑑賞による非日常性という性格は残存しているものの、今日では、その映像がもたらす驚異というよりも、娯楽としての側面がより強くなっている。摩訶不思議な映像を生じさせることで、映画館は、非日常を体験させる場としての性格を有していたのである。映画館で映し出される映像は、それ自体は虚構である。しかし、日常とは異なる物語を映し出すことで、非日常を生み出す。それゆえに、映画館は、非日常たる「異界」と結び付くのである。つまり、黎明期の映画、幻燈は、「この世」ならぬ異世界を映し出すという科学技術とオカルトが結び付いたものだったのである。現に幻燈は、幽霊を映し出す装置として、見世物や舞台で使用されたりもしていた。幻燈や映画館の文化的背景を踏まえるならば、ミセス・ミラーが、映画館で、「異界」の存在であるミリアムと出会うという設定は、遭遇の場として適当に選ばれたものではないと首肯出来るだろう。

以上のように、「出雲崎」、「ミリアム」は、その遭遇の場所も、「異界」との接点たりえるような場が選択されていたのである。自然景観と人工的な空間という相違はあるが、その場が有する「境界性」、「異界」性は大きく作用していると言えよう。

2.4.「異界」の存在との遭遇の影響

小説だけに限らず、昔話等における「異界」の存在との遭遇は、遭遇した人物に何らかの影響を与える。それは、死や不幸といった負の影響であるかもしれないし、富の獲得、状況の好転等の正の影響かもしれない。「出雲崎」、「ミリアム」もまたこの例外ではない。では、「出雲崎」と「ミリアム」では、どのような影響が主人公達にもたらされたのであろうか。次に掲げるのは、「出雲崎」での、女と出会ったことについての「男」の心情描写である。

> 女に出逢ってまだ三時間もたっていないのに、もう何カ月も女と旅しているような安らぎがあることに、男ははじめて気がついた。女が腹の子を産んだら、自分には孫のようなものだと思うと、妙になま温かい感情がもやもやと胸をひたしてくる[18]。

ここで、「男」は、女に出会った当初に抱いた「ふっと心が和んだ」（p. 259）、「久しぶりの心の温もりが胸をよぎる」（p. 259）との思いに加え、良寛堂での女の振る舞いを見て、温かい気分になっている。これまでの無頼な生き方ゆえに、無感動になっていたが、ふと胸に思いがけぬ感情が生じたのである。このことから、「男」にとって、女との出会いは、平穏をもたらすものであったことが分かる。つまり、「男」は、女と出会ったことで、一時的な精神的な安らぎを得ているのである[19]。

一方の「ミリアム」では、ミセス・ミラーの出会ったミリアムは、「男」の出会った女とは異なる。ミリアムは、外見こそ美しいが、ミセス・ミラーのアパートを訪れ、わがままな要求をし、思い通りにならないと花瓶を割るなどの問題行動を起こす。それゆえに、ミセス・ミラーは、恐怖を覚えるのである。「出雲崎」に登場する女と異なり、ミリアムは、ミセス・ミラーに平穏をもたらす存在ではない。ミセス・ミラーの境遇が生み出した老い、孤独の顕現した存在なのである。

「出雲崎」の「男」が、女と出会い、それまでの半生で失いかけていた感情を取り戻し、一時的な平穏がもたらされたのに対し、ミリアムは、ミセス・ミラーに過酷な現実を突き付けることになるのである。瀬戸内は、「ミリアム」との間テクスト性を示しながらも、「異界」の存在との遭遇がもたらす作用を反転させているのである。

2.5. 結末について

「出雲崎」の結末では、それまで同行していた女が消え失せており、女が何者であったのかが明かされないまま幕切れとなる。「出雲崎」は、物語の途中までは、リアリズムの文学に見えるが、結末に至り、急に幻想的な色彩が浮かび上がる。次に引用するのは、「出雲崎」の結末である。

> 蜃気楼が今、水平線に奇跡的に現われ、女を狂喜させてはくれないものだろうか。男は、「蜃気楼が出るかもしれないよ、海と空の間をじっと見てごらん」といいながらふりむいた。女の姿が見えなかった。かき消えたようにそこには誰もいなかった[20]。

結末では、「男」が、昔よく蜃気楼が発生したという古老の発言を思い出し、女に蜃気楼の話を振ると、女がいつの間にか消えていなくなっている[21]。これまで、「出雲崎」は、「男」の過去の回想を中心に物語が展開してきたが、蜃気楼の話題から急に女が「異界」の存在であったことが判明するのである。「男」の望むような蜃気楼は発生しなかったが、蜃気楼を彷彿とさせるような不思議な体験がもたらされたのである。結末で女は消えてしまうものの、「男」の女との遭遇は、「男」の生活に一時的な平穏を与えたと言えるだろう。

他方、「ミリアム」の結末では、「出雲崎」での「男」の置かれた状況と重なるものの、「男」の感じた思いとは、正反対の心情を引き起こすものである。次に掲げるのは「ミリアム」の結末である。

その微妙にかすかな衣ずれの音は、彼女の方にどんどん近づいてきて、大きくなり、ついに壁が振動で震え、部屋全体がその絹のささやきの波にのみこまれていった。ミセス・ミラーは、身体をこわばらせ、目を大きく開いて、もの憂げにこちらを見つめている女の子の目を見た。「ハロー」とミリアムがいった[22)]。

結末では、アパートの他の住人には、ミリアムの姿が見えることはなく、ミセス・ミラーにしか見えないことが判明する。そして、ミリアムは、ミセス・ミラーが、老いと孤独ゆえに生み出した存在であることが示されるのである。ミリアムとの遭遇は、ミセス・ミラーの老い、孤独の顕現としての意味だけではなく、ミセス・ミラーに辛い現実を認識させ、救いや安らぎをもたらすものではなかったのである。

「出雲崎」、「ミリアム」ともに、「異界」の存在との遭遇が描かれる。そして、遭遇の結果、「男」とミセス・ミラーの心境には変化が起こるが、その描かれ方は、対極とも言えるものであった。「異界」との遭遇は、「男」にとっては、一時的な安らぎをもたらすものであったが、ミセス・ミラーにとってのミリアムは、その孤独を強めるもの以外の何者でもなかったのである。

おわりに

「出雲崎」では、カポーティの「ミリアム」に言及されていた。その言及を手がかりにし、本稿では、「出雲崎」と「ミリアム」の比較を試みた。瀬戸内は、「男」にカポーティの「ミリアム」に言及させることで、「出雲崎」が、幻想的な結末を迎える作品であることを示唆していた。しかし、「出雲崎」、「ミリアム」に幻想性は共通するものの、「異界」の存在との遭遇が、主人公達にもたらした影響は大きく異なっていた。

「ミリアム」でのミセス・ミラーのミリアムとの遭遇は、ミセス・ミラーの孤独を強めるものでしかなく、望まぬ「異界」との遭遇でしかなかった。一方、「出雲崎」の「男」は、女と遭遇することにより、一時的にではあるが、それまでの鬱屈した状態から解放され、心の平穏を得ることが出来た。そのため、「出雲崎」では、「異界」との接触・交流が、恐怖や不安といった負の感情のみを引き起こすものではないことが示されていた。

瀬戸内は、「ミリアム」を引き、その「異界」の存在との接触というモチーフを踏襲しながらも、「ミリアム」での孤独の深化といった結末を採用しなかった。「出雲崎」では、「男」が「異界」の存在である女との遭遇を通して、一時的な心の平安を得る物語としたのである。「出雲崎」において、瀬戸内が描いた「異界」は、カポーティの影響下にありながらも、「異界」が有する負の側面を除き、「男」を浄化させる役割を果たしていたのである。以上のように、瀬戸内の「出雲崎」は、「ミリアム」の変奏と位置付けることが出来るだろう。

瀬戸内には、日本の古典文学から影響を受けた作家というイメージがあるが、カポーティの「ミリアム」からの影響を示す「出雲崎」のような作品が存在しているのである。本稿では、瀬

戸内におけるカポーティ受容の例として、「出雲崎」について論じたが、今後も、瀬戸内の作品の比較文学的研究を進展させることを課題としたい。

註

1)「出雲崎」の本文は、『瀬戸内寂聴全集』第 15 巻に拠った。瀬戸内の宗教活動については、柘植（2009）がある。
2)「ミリアム」の本文は、新潮社刊の『夜の樹』所収の川本三郎訳に拠った。ただし、「マンション」という語を「アパート」と改めた。
3）瀬戸内の古典受容については、『源氏物語』の現代語訳や、創作の着想源となったことを指摘する呉羽（1993)、瀬戸内による『源氏物語』中での光源氏と王命婦の関係を推測する「読み」を検討した坂本（2018）等の論考が発表されている。
4）瀬戸内は、短編「灰」（1993）の中で、登場人物に好きな作家として、フォークナーの名を挙げさせている。「灰」では、主人公が、女子大時代に友人と好きな作家について語ったことが回想されており、その際に、フォークナーに言及されている。このことから、瀬戸内は、フォークナーに触れていることが示される。また、2013 年 8 月 10 日、NHK E テレで放送された『SWITCH インタビュー達人達』で、瀬戸内は、歌手の EXILE の ATSUSHI に、一番読むのは、外国の小説の翻訳版であると語っている。そのため、瀬戸内には、外国文学からの影響が認められる証左の一つとなろう。
5)「出雲崎」『瀬戸内寂聴全集』第 15 巻、p. 268.
6)「自作解説」『瀬戸内寂聴全集』第 15 巻、p. 364.
7)「ミリアム」における「二重身」、「影」については、山口（2015）があり、ミセス・ミラーの名とミリアムの名の類似が、「二重身」であることの証左としている。その他には、「ミリアム」のテクストに対して言語学的分析を行った宮下（1994）がある。
8)「出雲崎」、『瀬戸内寂聴全集』第 15 巻 p. 266.
9)「ミリアム」『夜の樹』p. 10.
10）ある共同体、社会内で周縁に位置している存在が帯びる「境界性」については、小松（1995）に詳しい。
11)「出雲崎」『瀬戸内寂聴全集』第 15 巻、p. 258.
12)「ミリアム」『夜の樹』、p. 11.
13)「出雲崎」『瀬戸内寂聴全集』第 15 巻、p. 259–260.
14）海辺が、儀礼等が行われる「異界」との遭遇の場であることは、山折（1997）に詳しい。
15）地蔵信仰については、渡（2011）が挙げられる。
16)「ミリアム」『夜の樹』、p. 10–11.
17）幻燈などの光学器械と「異界」との結び付きについては、高山（2007）や、ハーヴェイ（2009）などの指摘がある。
18)「出雲崎」『瀬戸内寂聴全集』第 15 巻、p. 273.
19)「異界」が来訪者、遭遇者にもたらす癒し・平穏の効果については、河合（2002）がある。
20)「出雲崎」『瀬戸内寂聴全集』第 15 巻、p. 273.
21）蜃気楼という怪しい光景の顕現に言及されることは、示唆的である。例えば、江戸川乱歩（1894–1965）の「押絵と旅する男」（1929)、横溝正史（1902–1981）の「かいやぐら物語」（1936）等の幻想文学でも、蜃気楼に効果的に言及されている。また、「出雲崎」の結末は、瀬戸内が新作能「夢浮

橋」（2000）を発表していることなどから、能楽からの影響もあるかもしれない。

22）「ミリアム」『夜の樹』、p. 30.

参考文献

カポーティ，トルーマン「ミリアム」『夜の樹』川本三郎訳、新潮社、1994 年.

河合隼雄『昔話と日本人の心』岩波書店、2002 年.

呉羽長「『源氏物語』と瀬戸内寂聴 ──「女人源氏物語」を中心として」『富山大学教育学部紀要 A（文科系）』44、富山大学、1993 年.

小松和彦『異人論 ── 民俗社会の心性』筑摩書房、1995 年.

坂本信道「或作家への報告：王命婦と光源氏」『女子大国文』（163）、京都女子大学、2018 年.

瀬戸内寂聴『愛と別れ ── 世界の小説のヒロインたち』講談社、1987 年.

────「海」『髪』新潮社、2001 年.

────「出雲崎」『瀬戸内寂聴全集』第 15 巻、新潮社、2002 年.

高山宏『近代文化史入門　超英文学講義』講談社、2007 年.

柘植光彦「瀬戸内寂聴 ── 超越する宗教者」『国文学　解釈と鑑賞』74（2）、至文堂、2009 年.

ハーヴェイ，ジョン『心霊写真 ── メディアとスピリチュアル』松田和也訳、青土社、2009 年.

宮下眞也「英文テクストの機能主義的分析：カポーティ「ミリアム」の解釈」『松江工業高等専門学校紀要・人文社会編』29、松江工業高等専門学校、1994 年.

薬師寺章明「文学の党派性についての走り書き的覚書 ── 瀬戸内晴美『死せる湖』の比較文学的研究」『日本大学理工学部一般教室彙報』14 号、日本大学、1973 年.

山折哲雄『日本人の宗教感覚』日本放送出版協会、1997 年.

山口修「“Miriam” 研究 ──「影」としての Miriam の役割」『大阪学院大学　外国語論集』69、大阪学院大学、2015 年.

渡浩一『お地蔵さんの世界 ── 救いの説話・歴史・民俗』慶友社、2011 年.

Capote, Truman. “Miriam.” *The Grass Harp and A Tree of Night and Other Stories.* New York: Signet Book. 1980.